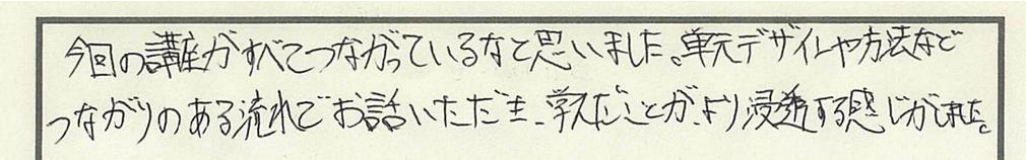
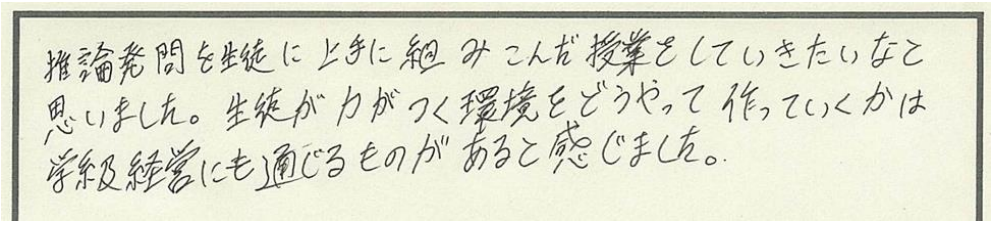
綿毛は飛ぶよ、どこまでも

山内　崇史（麻布中学校・高等学校）

1　はじめに

昨年、暑い夏に本田大輔という何とも暑苦しい男と飲みに行くと、「今度研修会を企画しようと思ってて、何の話をしたい？」と話が始まりました。本田先生の頭の中には着々と構想が練られており、その結果生まれたのが「次の一年をデザインする春休み」と題する英語教育飛鳥の会でした。約 3 時間に及ぶ研修会は、当日参加して頂いたある先生の感想によると、このようなものだったようです。


今回の講座がすべてつながっているなと思いました。単元デザインや方法などつながりのある流れでお話いただき、学んだことがより浸透する感じがした。


推論発問を生徒に上手に組みこんだ授業をしていきたいなと思いました。生徒が力がつく環境をどうやって作っていくかは学級経営にも通じるものがあると感じました。

まさしく本田先生が狙っていたことであり、登壇者の一人として非常に嬉しく思います。また、「どうすれば力のつく言語活動になるのか」という私からのメッセージが伝わって、しかも本田先生のお話とつなげて理解してくださっているのは望外の喜びです。

ただ、始まるまでは不安でいっぱいでした。遠方から来てくださる方も多く、参加者の皆様に充実した時間を過ごしていただけるだろうかと思うと、朝からひどく緊張してしまい、パソコンをカバンに入れるその手が震えていたのを覚えています。大勢の先生方のお時間をちょうだいして、自分の話を聞いていただくというのは責任の伴うことです。しかし、だからこそ発表者として深い学びを得ることができました。同時に、仲間の発表を観ることでも学ぶことがありました。そして、それらの学びはすべて、授業づくりに通じるものだと、この振り返りを書く中で感じています。

2　飛鳥の会にて学んだこと

(1) 究極に引き算する

持ち時間は 20 分。その中で何を伝えるのか、そのためにどんな導入をすればいいのか、この 2 点については、特に苦心しました。

本番一週間前、登壇者同士でリハーサル（中間評価）をした際は、高杉先生と本田先生から「言いたいことが多すぎる」と指摘されました。それでもかなり絞り込んではいたのですが、まだ足りなかったのです。的確な助言を受けて改善し、いい具合になりました。そこで、もう一度、本番前日の深夜に松山先生に聞いていただくと、「導入が長すぎる」と言われました。確かに冒頭から 4 分近く話し続けていて、これでは聞き手は飽きてしまいます。

導入は絶対に 3 分以内、できれば 2 分半に収めると決めて考え始めると、自然と伝わってほしいメッセージに関わる話だけに絞られていきました。特に最初の 1 分で、主題である「力のつく言語活動」ということばが出てくるように、助詞やつなぎ言葉、文末表現も工夫して、1 文字単位で削れるものは削ったのです。話したいこと、話した方がいいことはいくらでもありましたが、そんなことを言っている場合ではありません。限られた時間の中で、本当に伝わってほしいことに絞っていきました。

考えてみると、授業でも同じです。「育った生徒の姿」を十分具体的にイメージしておくことで、学期目標、単元目標、本時の目標が明確になります。目標が明確になれば、それに向けて必要な活動や指導も見えてきます。「今この授業」の中で、何を伝えないでおくかが明確になり、指導の重点化を図ることができます。（飛鳥の会に足を運んでくれた同僚２名も、４月に会うと、春休み中に準備していた新年度の授業計画について、にこにこしながら「ゴールが見えるようになって、やりたいことを盛り込みすぎないようになった」と異口同音に話してくれました。）

また、生徒の活動時間を増やす上で、指示や説明は極力短くすべきですが、これまで １ 文字単位で考えたことはありませんでした。Oral Interaction も、極力短い時間で最大の効果を上げられるように原稿を書いて練習すべきだと思いました。今後は、生徒の活動時間をより増やすことができそうです。

（2）一人ひとりを大切にすることが全ての土台となる

上述の通り、１ 文字を惜しんで何とか時間内に話を収めようとしていたものですから、持ち時間の短さを言い訳にして、参加者とやり取りをする場面、参加者に委ねる場面をあまり作っていませんでした。授業において、（教師の）やりたい活動が多すぎて、生徒たちが受け身になることがありますが、まさにその状態に陥っていました。しかし、他の皆さんの発表、特に本田先生の発表を観て、持ち時間の短さは言い訳にならないのだと痛感しました。

例えば本田先生は、参加者の方々とインタラクションしながら、個々人の考えを引き出し、場を活性化させていたからです。そこには、一人ひとりと目をつなぎ、一人ひとりの存在を大切にする教師の姿がありました。自分の発言が講演（授業）の進行を左右する、そんな講演（授業）であれば、参加者（生徒）はその場にいる意味を実感するでしょう。自分の考えが受け止められれば、居心地よく感じることでしょう。本田先生の遊び心あふれたコメントを聞いているうちに、気がつけばメッセージがしっとりと腑に落ちていくのです。

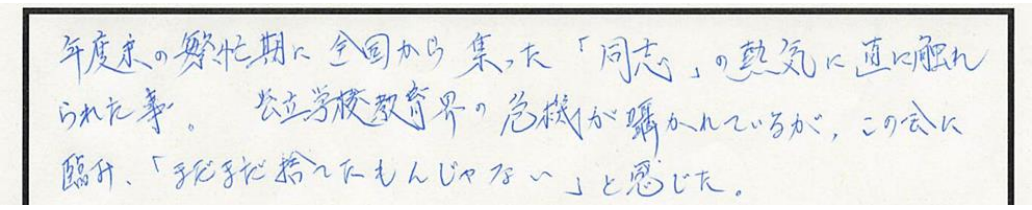
また、本田先生の振り返りには、ご自身が対話を通して得た参加者の情報が書かれています。限られた時間の中で、しっかりと参加者の状況を見取り、参加者とつながっているわけです。それこそがあらゆる教育活動の土台です。だからこそ、本田先生の発表内容に対する感想が多かったのではないかと考えています。

見取る、つながる・・・頭ではわかっていますが、今の自分はできていません。私の発表の中で「リテリングとは何か知っていますか？」と問いかけました。そのとき、グー（知らない）・チョキ（理解に不安がある）・パー（よく知っている）のいずれかを挙手して示してもらいました。しかし、誰がグーで、誰がチョキだったか、記憶していないのです。恐らく本田先生であれば、特にグーの人は覚えてしまうのではないかと推察します。その後、どこかのタイミングで、その方に「分かりましたか？」と尋ねることなど、わけなくやってのけてしまうでしょう。

2025 年度は、支え合い、聴き合い、高め合う学習集団になれるよう支援することに注力していくつもりです。そのとき、本田先生のように生徒を具体的にみる（観る・診る・看る）ことを意識し、一人ひとりの存在を丸ごと受け止めるような温かいまなざしをもった教師になっていきます。

3　おわりに

私自身が豊かな学びを得られた飛鳥の会ですが、参加者の方々はどうだったでしょうか。ある方が、こう書いてくださっていました。


年度末の繁忙期に全国から集った「同志」の熱気に直に触れられた事。公立学校教育界の危機が叫ばれているが、この会に臨み、「まだまだ捨てたもんじゃない」と感じた。

まさに会場には熱気がこもっていました。3 時間ずっと全員が集中を切らさずに学んでいました。それに感化を受けた方がいらしたというのは、本当に嬉しいことです。加えて、先日、ELEC 同友会主催のワークショップに参加した際、「山内先生！先週、飛鳥の会でお世話になりました。」と声をかけてくださった先生がいました。思わず照れてしまいましたが、とても嬉しかったです。同僚も 2 名来てくれて、それぞれ学んだことを早速活かし始めています。

飛鳥の会は、指導法を伝えるというよりは、共に教育という難事に立ち向かう仲間への呼びかけといった色が濃いと思っています。ここで生まれた人の縁が、今後強くなり、また広がっていくことを心から願っています。

最後になりましたが、つながりが生まれる素敵な場に呼んでいただいた本田先生、事務仕事を瞬時に終わらせてくださった名司会の宮﨑先生、安定感抜群で精神的支柱である高杉先生、初めてのセミナー講師同士一緒に緊張してくれた風見先生、前日深夜の呼びかけに即答してくれた松山先生、ありがとうございました。そして、このような素敵な仲間に巡り合えたのは、原点に中嶋塾@東京 2023 があるからです。中嶋先生にも心より感謝申し上げます。